

仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
 980 仙台市本町一丁目2番12号
 電話〇二二二一七三七七番
 編集・発行人 首藤 正義

「平和」について

— 〽平和旬間〽に思う — 平賀 徹夫

日本の司教団が「平和旬間」を設定したのは昭和五十七年であったから、今年は四年目となる。わが仙台司教区では平和のために働く精神がどれだけ深まり、それに沿う動きがどれだけ現れているだろうか。

平和旬間とは八月六日から八月十五日まですなわち、「戦争と平和について考え行動するため、最も悲惨にして身近な広島・長崎の事実を思い起こすに適した日から、平和の元后なる聖母を通じて祈るのにふさわしい聖母被昇天の大祝日までの十日間」をいう。

平和を望まない人はいない。一方、平和について誰もが納得できるような説明はない。とすれば平和がわかるためには「平和とは何か」と問う以上に、「平和を望んで何を行なうか」が大事なことになる。今世界は、アジアは平和なのか、日本は本当に平和だと言えるのか。職場は、近隣との関係は、夫婦、親子は平和なのか、また基本的に自分は神との

平和（和解）のうちにあるのか。この個人・家庭から世界大の平和に至るまで包みこみ、そのどこかに平和が欠けるのを感じるなら、平和をもたらすために働く余地は必ずある。

虚偽、不信、分裂、戦争、軍拡、核兵器、憎悪、殺人、不正、飢餓……平和に反する現実あまりにも強大複雑で圧倒されてしまふ。であるからこそ神が与える武器、信仰の盾をかざし聖霊の剣をとり、あらゆる祈りと願いをもってどんな時にも聖霊によつて祈る（エフェソ6）よう求められている。

では平和のために何ができるのか。「何をすればいいかわからない」と言うのは怠慢のそしりを免れない。既に示唆・提供されている。具体的に言えば、教会のあらゆる力が流れ出る泉である典礼、特に聖体祭儀において、本気で平和のために祈っているだろうか。共同祈願に自発的なその祈りが出るだろうか！岩手地区の創意による平和旬間のためのパン

フレットが各教会に配られたが、真剣に活用されているだろうか。その祈りが真剣なものなら、それは家庭での祈りにひき継がれない筈はなく、またそれも本気ならば、夫婦は子供の前で分裂（ケンカ）をしてはいられない。隣近所との関係において然り、日本のそして世界の現実に対して声を発する必要において然り。

平和旬間とは十日間のこと。しかし平和のための働きはそれで終り得ない。そして教区の今年から三年の目標は、「キリストの平和の使者になろう」と掲げられており、「平和をもたらす人は幸い」との主の言葉は厳然として常にある。

司教様の日程

(7月30日現在)



- 8月25日 9月8日 ローマ(アド・リミナ)
- 9月9日 教区司教団役員会
- 11日 中央協・財務特別委員会(東京)
- 12日 男女修道会合同役員会(東京)
- 14日 水沢教会献堂式
- 16日 福島県カトリックの集い・会津若松教会百周年記念
- 17日 石名坂医会総会での講話(仙台)
- 18日 社会福祉法人理事会(仙台)
- 19日 常任司教委員会、カリタス・ジャパン(東京)
- 23日 司教評議会(仙台)
- 29日 青森県信徒大会(弘前)

「カテドラル建設」その後

カテドラル再建準備会

本年2月7日、元寺小路教会で開かれたカテドラル再建準備会第一回会合の議事録の冒頭に次のように記されている。

「齋藤神父より、この準備会発足までの経過説明を含めてのご挨拶があり……これから準備会にやって頂くこととして、先の『カテドラル再建設の意見集約』を踏まえ、カテドラル建設計画の骨子づくりを検討願いたい旨、説明があった。」

以来、齋藤神父様から要請を受けた14名が、神父様を中心に、月に2回、夕方6時から9時頃まで、再建設についての話し合いを続け、7月29日の会合をもって12回を数えるに至った。

七月七日の七夕の日、韓国人のトランプスチン志願者のLさんとRさんに出会いまし
た。彼女たちは日本語学校に通うために、私のいる東京・小金井の寮に入ってきた声
のです。二人との出会

いは心に強く響きました
。一人一人をととも
大切にしてくれるので

若者。そこからキリストの温かさ・ぬくもり
が伝わってき、言葉では通じないことがあ
つても心で通じる何かを感じます。
幼児洗礼の私が、本当の意味でキリスト
を体験したのは大人になってからのことで

温かさ

温かさ



「イエズス様って素晴らしいね」って、思
わず口でできる彼女たちの関わり方を見て、
キリストとの出会いのあの体験を新たにし
たばかりでなく、福音宣教の中心はこれな
んだと実感したのです。(木村 たつ子)

現在、元寺小路教会敷地内には、小教区・
教区・修道院の建物が散在している。東仙台
にある司教館も含めて、これらの建物が、教
区の中心的役割を果たしてゆくために、どのよ
うにであったらよいかということについての将
来的展望に立った試案づくりが、佐藤司教様
から齋藤神父様に委嘱されたのが昨年4月の
ことである。

これを受けて、齋藤神父様によって召集さ
れたのが前述の準備会である。この会におい
て何らかの実現可能な案がまとまった段階で、
後日司教様によって設置されると思われ、
「カテドラル建設委員会(仮称)」にその素
案を提示するのがこの会の務めであると理解
される。

この会において、まずはじめに取り組み

す。それ以来、キリストを伝えたいしその愛
をわかちあいたい欲求が生じてきました。
現在私は二度目の学生生活。そしてこの二
人に接するうちに、大事なことを忘れかけ
ていたのに気づきました

たのは、「意見集約」の検討である。いずれ
の意見も貴重なものであり、その一つ一つに
ついて論議を尽くした。次に、それらを一つの
アイデアのもとにまとめてゆく作業に入る。
法的問題も種々提起された。往きつ戻りつ、
暗中模索という感じのする会合を重ねてきた。
私どもに託された仕事は、当初予想された
ものよりも、はるかに難しいものであること
を準備会参加者は一様に感じている。この限
られた敷地内で、市民に開かれた呼びかける
教会としてゆくために、また、教区全体の中
心的役割を将来ともに十二分に果たせるような
場とするためには、どのようにしたらよいか。
資金的な問題をも考え合わせる時、気の遠
くなる思いさえする。

しかし、他方では、この仕事の成果が、今
後の教区の歩みに、少なからぬ影響を与える
ものであることを思うとき、責任の重大さを
感じないわけにはいかない。出来る限り教区
の皆さまのご要望に応えられる、しかもあく
までも現実的な案になんとかまとめあげなけ
ればいけない。そのためには、今、しばらく
の間、産みの苦しみを耐えなければならぬ
ものと思われる。

8月はお互いの日程の都合がどうしても
つかず、会議は休みとし、9月から再び、新た
な気持ちで取り組んでいきたいと思っている。
教区民全員からの大きな期待を背負って進め
られていく今の仕事は、何らかの形で実を結
ぶ日がくるように、皆さまのお祈り、ご声援
をお願い申し上げます。

県カトリックの集い

福島県カトリックの集いと

会津若松教会百年祭

9月16日(月)、午前10時から午後3時まで、会津若松ザベリオ学園を会場に、福島県カトリックの集いが開かれる。今回は会津若松教会の百年祭に当たるので、百年祭がメインとなり、ミサ・式典・講演・祝賀会をもって県の集いとする。講演は「蒲生氏郷とその周辺」についてチースリック師(イエズス会士・上智大学)が話される。

聖書深読会

日時 10月26日(出)19時~21時
27日(日)9時~17時

会場 聖ドミニコ学院高校

指導 奥村一郎師(カルメル会)

会費 二千五百円(宿泊四千元)
(27日昼食代を含む)

持参品 聖書・筆記用具

申込締切 10月20日(日)

申込方法 Tel 25-1-055 聖ドミニコ修道院へ
またはハガキにて。

(参加者名、所属教会または修道院、宿泊の有無、聖書深読の経験の有無を明確にお知らせください。)

責任者 聖ドミニコ修道院シスター大沼

Tel 25-1-055・22-16337



青森県カトリックの集い

2年毎に行われる恒例の「青森県カトリックの集い」が、次のように開催される。

日時 9月29日(出)午前10時~午後4時
場所 弘前農協会館

テーマ 「明日の教会をめざして」
―教会の未来は家庭にかかっている―

講師 井上洋治師(東京教区)

講演には中学生以上が参加する。
小学生以下はミサ以外別企画。

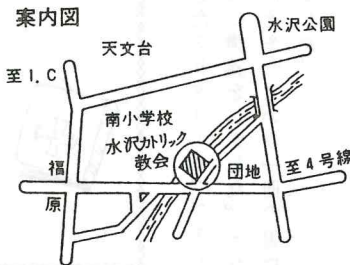
当日までに、各教会でテーマにそって話し合い、そのまとめを発表する。

水沢教会 移転(8月1日より)

水沢市横町一番街再開発にともない、水沢教会は8月1日、左記へ移転しました。

献堂式 9月14日午後2時より佐藤司教司式

移転先・岩手県水沢市字川端191番地1
電話・(0197) 25-7707
交通・国鉄水沢駅からバスで10分位。
見分森行 } ひばりが丘下車
高橋行 } (歩いて2・3分)



* 神学院報告(3)

我が家に帰って

アジジのフランシスコ小野寺
(元寺小路出身)



早いもので、神学院に入ってから4か月が経過した。東京で生活していて感じることは、いかに私達が多くの方々の祈りと惜しみない援助によって支えられているか、ということである。まずは心から感謝すると同時に、一体自分はこの4か月間何をやってきたのだろうか?と不安すら覚える。

さて、初めての夏休みを教区に戻って過ごしている。「やっと我が家に帰ってきた」という気分だ。とは言うものの毎日が戸惑い、不安、緊張の連続だ。もつとも、弛緩した状態よりは、程よい緊張状態を保ち続けたいと思うのだが...

仙台に戻ってきて、沢山の人間に暖かく迎え入れて頂き、大変うれしく思っている。そればかりでなく、未熟者の私を、合宿や練成会等、様々な形で敢て使ってもらっているのだが、これは私にとって非常に大きな喜びとなっている。

これから先、一人の人間としてバランスよく成長させてもらえれば、と切に願っている。

毎日が試行錯誤の状態だけれども、どうぞ末長く御指導の程を!!

小林有方司教 金祝ミサ説教(2)

五十年を振り返って



教会建設にとりかかる

私が戦争で南方に行く前に治めておりました大阪の司教座聖堂川口の教会は、帰ってみれば一面の焼け野原、ただ夏草がぼうぼうと茂り、見るも無残な状態でした。

これを見た私は、この地に司教座聖堂の回復は希望がもてないとみて、大阪の南の繁華街、阿倍野という所に新しい教会を造りました。当時の教会としては、比較的よい立派な教会が出来たのです。しかしその教会も30数年を経て老朽化し、ついこの3月取り壊されて、新しい鉄筋コンクリートの見事な教会に生まれ変わりました。これは私にとって、本当に大きな喜びでした。

著書「真理とは何ぞや」の発行

まだ平和条約が結ばれていない時でしたが、私はカナダから招請を受けて、カナダの大学に入学致しました。2年間程の留学でしたがそれを終えて帰って来て、さあこれからのいよいよ宣教に取りかかろうとしたその時、キリスト教は戦争の落し子と言われ、あとからあとから求道者が増えていきました。私はその時、アメリカ軍のチャペルであった大阪の繁華街

の真ん中にありましたミリタリーチャペルで、30回継続の公教要理の講義をしました。それが後に「真理とは何ぞや」という一冊の書物となって発行されました。

仙台教区長に任命される

いよいよこれから宣教にかかろうと思っていた矢先、突然に私の上に驚くべきことが起りました。と言うのは、当時の教主、ピオ十二世から、「仙台教区長に任命する」という破格の出来事がふりかかってきたのです。

私と仙台とは何の関係もなかったし、仙台にはいまだかつて足を踏み入れた事がありませんでした。しかしローマ教皇の命令もだしがたく、お受けして仙台に参りました。

私の司祭叙階以来50年間の31年を、司教として仙台教区に過ごさせていただいたわけですから、私の50年の大半は、この仙台の地で過ごしたわけです。

まだ若かった私は、気負って意気揚々と皆さんの所へ参りました。けれども、私が教区長という重職には堪えられない人間であるということ、私の愚かさ、至らなさ、私の浅はかさ、そういうものを見せつけられたのは、その後ではありませんでした。

私は、とんでもない間違いを起したのじゃないかと思つたのです。もちろん沢山の過ちは犯しましたが、私の人生で、一番大きな過ちは、「仙台教区長」というこの任命を、平然として受け止めたということだつたと思いません。私は本当に皆さんに申訳ないことをしたと思つております。

第二バチカン公会議に出席

しかし、司教になってよかつたと思つたところが一つありました。もちろん皆さんの心からの深い愛情によつて支えていただいたという事は、本当に有難いことであり感謝の言葉もございませんけれども、あこのために、神様は私を司教にして下さったのかと思えたのは、第二バチカン公会議という世紀の祭典に、4か年にわたる全会期を通して出席出来たことでした。

そこで、私は聖霊がこの教会を根こそぎ揺り動かそうとしておられる。ヨハネ二十三世は、この第二バチカン公会議を新たなベンテコステ、二十世紀の新しいベンテコステ、聖霊降臨と名付けて、多くの反対を押し切つてあえてお開きになりました。そして、私はそこで、本当に力強く教会に働きかけようとしておられるということ、まざまざとこの目で見、この体で体験して参りました。

イエズス様は、最期の血潮の一滴までも流しつくして、「わたしの仕事は終つた」とおっしゃられて息をひきとられた、あの救いのみ

(5ページ下段に続く)

ブラジルを訪ねて(7)

東仙台 長井 和子

密林の中を大小の支流を一つにまとめ大西洋へと蛇行しながら帯状に続くリオ・アマゾンの絶景を眺めながら、サンパウロを発つて10時間、密林の真ん中を切り開いた小さなサンタレン空港に降り立った。足下から立ちこめ吹き上げる熱気、夕方6時を過ぎたというのに40度を越す暑さに、体中からふき出る汗がたちまち白い塩の固まりとなった。昨日は雪のサンタ・カタリナで震え、今日は灼熱のバラ州。ブラジルの広さに感心ばかりしていられない。ここにも人が住み生活がある。人々の生活のすべてはこのリオ・アマゾンによって支えられている。真っ赤な夕日を飲み込むかのようなアマゾン河にとっぷりつきり(沐浴と服の洗濯のため)あたりを見渡す時、神の創造のみ業への賛美が口の上る。このすばらしい大自然とそこに置かれた者、そしてすべてはよかつたと神はおおせになつた。雨期の洪水のもたらした土砂は密林の中で大小無数の果実を結びせ川には魚、密林には鳥や獣が。人々には必要に応じ自然の秩序を保ちつつ、生きていた。大自然は皆のもの。どの木から誰でも取って食べることが許されている。「野のゆり、空の鳥を見よ(ルカ12章22-32)みことばを深く味わい、神のいつくしみと御父のみこころを思う感謝の一時であつた。このことを日本で話すと、「ブラジルは食べ物があるからいい。アフリカのような飢餓がないから」と言う。本当に

そうだろうか。今アマゾン流域は金を求める山師たち、大会社、大プロジェクトの技師たちが流れ込み、豊かな大自然を略奪、肥沃で便利な土地は大農場主に狙われ、大資本家、外国企業は舌なめずり折あらばとこまえている。材木、魚、鉱物を積んだ無数の船が激しく往き交い、20数個のタイヤをつけた大型トラックが赤い埃を立てて何台も通り過ぎていく。インジオや貧しい人達は奥地へ奥地へと追いやられ生活権が奪われる。

アマゾンの密林が世界の天候を保っていることは誰もが知っている。その密林が切り倒されれば、ブラジル砂漠の出現と世界の農産業、牧畜に一大変化が起きることは明らかであり、飢餓の手はずでに延ばされている。今年には国際森林年、地球に緑を、それはハゲ山に。飢えている人にパンを、兄弟愛を示そうといひながらパンのかわりにサソリを。

私自身貧しい国で飛行機で旅をする。労働者の一年分の給与に匹敵する料金である。そんな矛盾に悩みながらアマゾン流域の村々をパドレと船で宣教に出かける。リオ・アマゾンは又みことばを運ぶ道でもある。早朝空港に見送って下さったドン・リノ司教は、

「私たちは今緊急な、しかも大きな問題と取り組んでくれる勇氣ある宣教師を必要としている。年老いた宣教師でも時には70の共同體を受け持ち、距離が遠く行きにくい所も多い。日本からどなたか宣教師を送って下さるよう司教様にお願ひして下さい」固い握手のなかで言われた言葉が耳に焼きついている。

(前ページからつづく)

業が、この日本にわずかに0.4%のカトリック信者しか生みだしてないという、そういう結果しか生まれなかつたのか。あのイエズス様の、神のみ子イエズス様のあの十字架のいけにえが、今全世界に見るような力のない教会と言いましようか、一つの小さな戦争さえも止める力もない教会、それが神のみ子、イエズス・キリストの命を賭けた救いのみ業の結果なのか、ということ、私は公会議にあずかつてしみじみと味わわされたのでした。

(次号につづく)

【編集室から】



最近の「仙台教区報」の変化にお気づきでしょうか。いくつかの連載があつて、行事、会議等の「報告」的なものから、読者の投稿による「読む」教区報に変化しています。「おらが教会」も54回を数え、残すところ2回となりました。若者の海外での体験学習、そして青年年にもんで「若者の声」の連載が続いております。また小林司教様の「金祝ミサ説教」長井和子さんの「ブラジルを訪ねて」と。

教区報は教区本部からの一方的な報告にとどまるのではなく、教区民一人ひとりの声による交流の場でもあります。前述の連載ものに対しても、何らかの声が出ることによって、書き手ともどもこの紙面を通じて互いの交流、一つのコミュニケーションが行なわれるのではないでしようか。

(首)

おらが教会

(54)

宮城・塩釜教会



〔教会の歴史〕 塩釜教会が呱呱の声をあげたのは昭和22年頃である。元の町名を中新田といったが、現在は新富町である。昭和21年頃より、現教会から百メートル程の45号線国道の北側に土佐常雄(旧姓鈴木)さん宅に公教要理の研究会が行われた。深沢豊治、斎藤石雄神父様が週一度見えられて、そこに10名程の求道者が集まった。そのうちには非教会がほしいということで、同市江尻の民家を借りて仮聖堂ということになった。当時の指導司祭は既に亡くなったが長崎出身の永田徳市神父様であった。キリシタンの昔を偲ぶにたるとるような大きな鏝のついた丸い帽子をかぶられ、長いスータンのまま仙台から通われたものである。そのうち、神父様はこの仮聖堂に住み込まれるようになった。聖堂建設の願望は信者一同の心の中に燃え上がり、当時の浦川和三郎司教様を動かすことになった。同司教様は土地の物色のために、たまたま市内を見て歩かれた。そしてついに現在の位置に決まったのであるが、ここに決まるまでの経緯については、私は一時仙台に居を移していたのではつきり分らない。現在地に聖ミカエルに奉獻された献堂式が行われたのは昭和27年の10月と記憶している。それで昭和58年10月は献堂31年目に当るので盛大な祝賀会が催された。この時、教会の歴史を綴った小冊子「塩釜教会三十年のあゆみ」を編さん発行した。しかし要理研究会発足から教えるという年で38年目ということになる。

〔歴代の主任司祭〕 永田神父様は特技の持主で、鉢植の花作り、ロザリオ作りは素人ばなれであった。病を得られ、新聖堂で初ミサを上げられることなく司教館に移られた。その後本間神父様から貝沼神父様となり、この時幼稚園が併設された。神父様は寒い日であったが、信者宅の公教要理を終えて、バイクで教会に帰り着かれるや否や、玄関で心臓発作によつて急逝された。46歳の若さであった。信者一同は号泣した。その後、深沢豊治神父様が着任、この時教会機関誌「地の塩」が発刊された。これは現在まで続いている。深沢守三神父様の代になって旧聖堂はホールに、そして新たに現在の聖堂が建設された。鷹野達衛、土井文雄神父様と引継がれ、現在は平賀徹夫神父様である。当年40歳で岩手県出身。司教秘書・教区書記長兼塩釜教会主任代行ということになっている。頗るおだやかで、真摯、くつろいだ時に相当お酒が入ってもしゃんとしておられるのは頼もしい。

〔現況〕 信者登録数は約2百名。これまで出身シスター3名、日曜ミサにあずかる人は

約50名、特色は頗る子供が多いということである。ミサ中に子供が祭壇の下をくぐり抜けるといふハプニングもある。祝祭日は聖堂が一杯になる。都会的教会の片鱗があるようで、割合に転出入が多い。信者は塩釜市、多賀城市に半々ぐらい住んでおり、根のついた信者家庭が20戸位か。これが教会の安定基盤となっている。時々信者による所信発表の機会として信徒懇話会が催される。月一回行われる役員会は従来は夜の集会となっていたが、なかなか集まるのが困難なので、今年から第一日曜のミサ後昼間行うことにした。これには役員に限らず誰でも参加できる。あらゆる人の発想。意見を入れることができて風通しがよくなるのが期待できる。

また、5月と10月のロザリオの月には持ち回りの家庭集会を行っている。ロザリオ連禱の後、自由な座談会に移り、和気あいあいのうちに終わる。未信者の御主人の方の協力もあつて、こんなことをしているうちに次第に教会に來られることも多くなり、信者になられた例も少なくない。

壮年会としては独自の活動は何もしていないが、それぞれが仙塩地区の各会のメンバーとなつている。婦人会は数も多く強力で教会の中心、ボランティア活動等よく働いている。青姉会は日曜学校の指導者となつており、教会行事の推進役である。祝いの会食には家庭から一皿ずつ御馳走を持ち寄るのもこの教会の特色の一つであろう。(仁科 誠三)

.....